# どうぶつたちのキャンプ

## 3

葵むらさき

# 目次

第81話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第82話・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

## 第81話

ラサエルは二人の子をサブ触手でそれぞれ抱きながら居住ゾーンの清掃を行っていた。
子らはリズミカルに揺れる腕の中ですやすやと昼寝モードに入っている。
ふと居住壁を見やると、以前作成してもらった家族四体のフィギュアが高分子ケースの中で静かに、だが楽しそうに浮揚している。
もちろんその中にレイヴンも存在している。
レイヴン。愛するパートナー。
自分より生命活動歴は短いのに、どうしてか自分のことをいつも護り支えてくれようとする。本当なら自分の方がレイヴンに対し、保護機能を最大限発揮して、彼には心行くまで甘えてリラックスしてもらうべきなのに。
けれど実のところ、大いに甘えさせてもらっているのは自分の方だ。
ああ、レイヴン。いつもそうしてきた。
君は家族を、本気でまるごと護るつもりでいるんだよね。
その時、居住ゾーンに自律移動殻が接続されたという信号が検知された。
「やあ、ラサエル。久しぶりだね」
聞こえて来た声は、ハヤミのものだった。
「ハヤミさん?」ラサエルは清掃の触手を止め、殻の接続された居住壁域に向けて返答した。「お久しぶりです。突然どうしたんです?」しかし訊ねるまでもなく、ハヤミの来訪目的には察しがついた。
もちろん、レイヴンのことだ。
我が家の大切な守護担当は、明らかに予定より遥かにオーバーして地球滞在を強いられている。そう、本当なら今頃はもうとっくに、家族四人で再び寄り添い、触れ合い、冗談交じりの信号を交わして笑いながら、リラックスして甘え合っていたはずだ。

さてハヤミは、どう言い訳をするつもりでここに来たのか？
ラサエルはそんな本音を上手に本体内にしまい込み、居住壁域を溶解してハヤミ本体の透過を許可した。
「やあ、突然すまないね。そしてレイヴンの地球滞在長期化については、まことに申し訳なく思う。同時に彼の、業務に対する忠誠心と誠実さを評し、次の恒星回転期ボーナスについては、少なくとも過去最高の比率で計算されることが確定している」
「ほう」ラサエルはまんざらでもないという分子を放出させた。「それはとても喜ばしいですね。だけど今日の用件は他にもあるんでしょう？」
「ああ」ハヤミは突然、それまでの社交的膨張状態を解消し、実質五分の三ほどのスケールに本体を縮こまらせた。「そう……ラサエル、君は知っているのだったかな、ギルドという汎宇宙組織の存在を」
「ギルド、ええ」ラサエルは頷いた。触手の中の子が少しだけ向きを変えるが、起こすことはなかった。
「うん」ハヤミも頷いたが、すぐに次の言葉を発して来なかった。
「ギルドが、どうかしたんですか？」ラサエルは、触手が震えないように注意しながら訊ねた。まさか、レイヴンに何か？　それでもその言葉は言えない。
「その」ハヤミも大分、言葉を吟味したのだろう。やけに慎重に会話を続ける。「実をいうと、君の大切な家族、この可愛らしい子たちの父親である、レイヴンが……ギルドに、つけ狙われているらしいんだ」
「――」ラサエルはどう言えばいいのか考えることもなく「どうして？」と言っていた。「何故レイヴンが？　それでハヤミさん、あなた達はどのように動いているんですか？」
「ああ、もちろんすでに対策を講じているよ、ラサエル」ハヤミは、彼の生命活動歴数と職責グレードからすれば滅多に自ら振り回すことはしないのだろうその触手を、恐らく何恒星回転期ぶりにか忙しく蠢かした。「そこは安心してくれていい」
「でも、どうして――」ラサエル自身も自らに『落ち着け、大丈夫だ』と強く言い聞かせるが、その実今にも腕に抱いた子どもたちごと床に頽れてしまいそうだった。
「地球に、我々の信頼も厚い優秀なエージェントがいる。モサヒーという者だ。彼は地球に長く滞在していて、レイヴンら動物保護クルーが地球に行った時にはサポートもしてくれている」
「モサヒー……ああ」ラサエルはその名をレイヴンから聞かされたことがあった。
「そう。彼からこの度、緊急通信として報告が来たんだ。我々はそれですべてを知った。端的にいえば、ギルドは今我が星の動物マルティコラスを捕獲しており、その世話役としてレイヴンを捕まえようとしている。だが地球の動物たちはギルドの所業をよく思っておらず、奴らに闘いを仕掛けようと算段し、そして素晴らしいことに彼らは、レイヴンを助け、護ってくれている」
「え――」ラサエルは息を呑んだ。
地球――
レイヴンが、あれほどまでに嫌っていた、惑星。
そう、それだからこそ今回の出張も、さっさと終わらせてすぐに帰って来るものと思っていた。
しかしその星のもとで、予期せぬアクシデントが起き、危機にさらされているレイヴンを、地球の動物たちが助けている――
地球の、動物たちが？

「どう、して……」ラサエルはやはりそうとしか言えずにいた。

# 第82話

それはモサヒーの『機転』に他ならなかった。

レイヴンとの交信は、レイヴンの言う通り開始後地球時間で一分程度経過すると、ギルド員コードセムーに気づかれ、通信帯に入り込まれ、丸聞こえになる。それだけでなく、実質彼女の独壇場となる。

レイヴンは確かにそれを回避すべく、ごく短時間で、レイヴンからの一方的な情報送信を行うと告げ、そのようにした。

お陰でモサヒーも、シャチらが今どんな戦略で動いているのか、現状どこまで進捗しているのか、そして今回レイヴンが彼らに提言した事は何か、そういった情報をすべて知ることができた。

しかし彼は満足していなかった。

それは何故かというと、言うまでもなく今この状況ではモサヒーからレイヴンに、逆方向のメッセージを送ることとができないからだ。レイヴンに返事をすることも、質問や確認をすることも、そしてモサヒー自身が思いついた『方策』を提案してみることも叶わない。

自分がレイヴンに信号を送ったとすると、自分の僅かな挙動によりそれは恐らく一分よりも遥かに短い時間でセムーに気づかれるだろう。もしかすると一瞬の内にばれてしまい、あたかも彼女の極小コピーがモサヒーの体内に潜伏しているかのごとく、送信内容をほとんどすべてつかまれてしまうかも知れないのだ。

ならば。

モサヒーは上空、遥か上、大気圏を抜けたさらに高度へと設定を向けた。

本社への緊急通信ポートを開くのだ。

彼は慎重に記憶帯から必要なログをまとめ直し、可能な限り信号量を抑えた上で、それを投げ飛ばした。

何食わぬ顔で浮揚推進しつつそれを行うのは、モサヒーだからこそできる事だっただろう。

それでもセムーは――この恐るべき精鋭ギルド員は、一瞬モサヒーを見た。

モサヒーは目をそらさず、むしろほんの一瞬だけ彼女を見つめ返した。

するとセムーはすぐに頭の双葉を高速回転させ始め、恐らく幸福を感じながら、元通り前方を向いてくれた。

モサヒーはそのようにして、本社へ事の次第と自分の考え、そしてそれを本社からレイヴンへ伝えて欲しい旨を、送ったのだった。

◇◆◇

「そうなんだ、ラサエル」ハヤミは大きく頷き、ラサエルを安心させようとした。「地球の動物たちは、恐るべき、そして最高の作戦でギルド員たちを地球から殲滅しようと企てている。その作戦はレイヴンにも語られ、今なんと、レイヴンとモサヒーの方からも、その作戦に協力したいと提言している状況なんだ」
「レイヴンが？」ラサエルは再び触手を震わせた。「そんな、レイヴンがギルドと闘う必要があるんですか？」
「そこが、レイヴンらしい所だと思わないか、ラサエル」ハヤミは何事か考え込むように触手を持ち上げ嘆息した。「ただ護られ助けられただけで、彼ははいさようならと立ち去るような遺伝的性質ではないだろう？」
「――」ラサエルは居住壁の高分子ケースを見た。その中で楽しそうにダンスをするレイヴン。確かに、その通りだ。レイヴンはだからこそ、地球の動物たちからも愛され、信頼され、情報を分かち合えるのだ――「それで」再びハヤミを見る。
「うん」
「ハヤミさん、あなた方は今現在、この状況に対してどう動こうと算段しているんですか？」ラサエルはずばりと訊いた。「地球の動物や、レイヴンやモサヒーに、まさか任せっきりにする気ではないですよね？」
「もちろんだ」ハヤミは早口で叫んだ。「我々は」しかしそこで言葉が止まる。
「――我々は？」ラサエルはまっすぐにハヤミを見たまま促した。
「うん」ハヤミは咳払いし「これは、あくまで今ここだけの話にしておいて欲しい。まだ詳しく決まったことではないのだが、我々の考えとしては、レイヴンには可及的速やかに本国へ帰還してもらうようにしたいと思っている」

どうぶつたちのキャンプ　3

著　者　　葵むらさき

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社